

冬の蠅

梶井基次郎

青空文庫

冬の蠅はえとは何か？

よぼよぼと歩いている蠅。指を近づけても逃げない蠅。そして飛べないのかと思っているとやはり飛ぶ蠅。彼らはいったいどこで夏頃の不逞ふていさや憎々しいほどのすばしこさを失って来るのだらう。色は不鮮明くろろずに黝くろろずんで、翅したい体は萎縮いしゆくしている。汚い臍物で張り切っていた腹は紙撚こよりのように瘦やせ細っている。そんな彼らがわれわれの気もつかないような夜具の上などを、いじけ衰えた姿で匍はつているのである。

冬から早春にかけて、人は一度ならずそんな蠅を見たにちがいない。それが冬の蠅である。私はいま、この冬私の部屋に棲すんで

いた彼らから一篇の小説を書こうとしている。

1

冬が来て私は日光浴をやりはじめた。溪間たにまの温泉宿なので日が翳かげり易い。溪の風景は朝遅くまでは日影のなかに澄んでいる。やっと十時頃溪向こうの山に堰せきとめられていた日光が閃せんせん々と私の窓を射いはじめる。窓を開けて仰ぐと、溪の空は虻あぶや蜂はちの光点が忙しく飛び交っている。白く輝いた蜘蛛の糸が弓形に膨らんで幾条も幾条も流れてゆく。(その糸の上には、なんとという小さな天女！ 蜘蛛が乗っているのである。彼らはそうして自分らの身体

を溪のこちら岸からあちら岸へ運ぶものらしい。昆虫。昆虫。昆虫。
初冬といつても彼らの活動は空に織るようである。日光が檜かしの梢に染まりはじめる。するとその梢からは白い水蒸気のようなものが立ち騰のぼる。霜が溶けるのだろうか。溶けた霜が蒸発するのだろうか。いや、それも昆虫である。微粒子のような羽虫がそんなふうに群がっている。そこへ日が当たつたのである。

私は開け放つた窓のなかで半裸体の身体を晒さらしながら、そうした内うちうみ湾のように賑やかな溪の空を眺めている。すると彼らがやってくるのである。彼らのやって来るのは私の部屋の天井からである。日蔭ではよぼよぼとしている彼らは日なたのなかへ下りて来るやよみがえつたように活気づく。私の脛すねへひやりととまった

り、両脚を挙げて腋の下を搔くような模ねをしたり手を摩りあわせたり、かと思うと弱よわしく飛び立っては絡み合ったりするのである。そうした彼らを見てみると彼らがどんなに日光を恰しんでいるかが憐れなほど理解される。とにかく彼らが嬉戯するような表情をするのは日なたのなかばかりである。それに彼らは窓が明いている間は日なたのなかから一步も出ようとはしない。日が翳るまで、移ってゆく日なたのなかで遊んでいるのである。虻や蜂があんなにも澆刺と飛び廻っている外気のなかへも決して飛び立とうとはせず、なぜか病人である私を模ねている。しかしなんとという「生きんとする意志」であろう！ 彼らは日光のなかでは交尾することを忘れない。おそらく枯死からはそう遠くない彼

らが！

日光浴をするとき私の傍らに彼らを見るのは私の日課のようになってしまっていた。私は微かすかな好奇心と一種馴染なじみの気持から彼らを殺したりはしなかった。また夏の頃のように猛たけだけしい蠅捕り蜘蛛がやって来るのでもなかった。そうした外敵からは彼らは安全であつたと言えるのである。しかし毎日たいてい二匹宛ほどの彼らがなくなつていった。それはほかでもない。牛乳の壘びんである。私は自分の飲みつ放しを日なたのなかへ置いておく。すると毎日決まったようにそのなかへはいって出られないやつができた。壘の内側を身体に付著した牛乳を引き摺ずりながらのぼつて来るのであるが、力のない彼らはどうしても中途で落ちてしまう。私は

時どきそれを眺めていたりしたが、こちらが「もう落ちる時分だ」と思う頃、蠅も「ああ、もう落ちそうだ」というふうに動かなくなる。そして案の定じょう落ちてしまう。それは見ていて決して残酷でなくはなかった。しかしそれを助けてやるというような気持は私の倦アンニユイ怠怠からは起こって来ない。彼らはそのまま女中が下げてゆく。蓋ふたをしておいてやるという注意もなおのことできない。翌日になるとまた一匹宛はいつて同じことを繰り返していた。

「蠅と日光浴をしている男」いま諸君の目にはそうした表象が浮かんでいるにちがいない。日光浴を書いたついでに私はもう一つの表象「日光浴をしながら太陽を憎んでいる男」を書いてゆこう。私の滞在はこの冬で二ふた冬目であった。私は好んでこんな山間

にやって来ているわけではなかった。私は早く都会へ帰りたいたい。帰りたいと思いつながら二た冬もいてしまったのである。いつまで経っても私の「疲労」は私を解放しなかった。私が都会を想い浮かべるときに私の「疲労」は絶望に満ちた街々を描き出す。それはいつになっても変^{へん}改^{かい}されない。そしてはじめ心に決めていた都会へ帰る日取りは夙^とうの昔に過ぎ去ったまま、いまはその影も形もなくなっていたのである。私は日を浴びていても、否、日を浴びるときはことに、太陽を憎むことばかり考えていた。結局は私を生かさないうであろう太陽。しかもうつとりとした生の幻影で私を瞞^{だま}そうとする太陽。おお、私の太陽。私はだらしのない愛情のように太陽が癩^{しやく}に触^ふった。裘^{けごろも}のようなものは、反対に、緊^{ストレー}

ト・ジャケツト
 迫衣

のように私を圧迫した。狂人のような悶えもたでそれを引き裂き、私を殺すであろう酷寒のなかの自由をひたすらに私は欲した。

こうした感情は日光浴の際身体の受ける生理的な変化——さか旺ん
 になつて来る血行や、それにしたがつて鈍麻してゆく頭脳や——
 そう言ったもののなかに確かにその原因を持つている。鋭い悲哀
 を和やわらげ、ほかほかと心を怡たのします快感は、同時に重つ苦しい不
 快感である。この不快感は日光浴の済んだあとなんとも言えない
 虚無的な疲れで病人を打ち敗かしてしまふ。おそらくそれへの嫌
 悪から私のそうした憎悪も胚胎はいたいしたのかもしれないのである。
 しかし私の憎悪はそればかりではなく、太陽が風景へ与える効

果——眼からの効果——の上にも形成されていた。

私が最後に都会にいた頃——それは冬至に間もない頃であつたが——私は毎日自分の窓の風景から消えてゆく日影に限りない愛惜を持つていた。私は墨汁のようにこみあげて来る悔恨といらだたしさの感情で、風景を埋めてゆく影を眺めていた。そして落日を見ようとす切なさに駆^かられながら、見透しのつかない街を慌^{あわ}てふためいてうろろしたのである。今の私にはもうそんな愛惜はなかつた。私は日の当つた風景の象徴する幸福な感情を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎むのである。

溪^{たに}の向こう側には杉林が山腹^{おお}を蔽^{おほ}っている。私は太陽光線の偽^ぎ

瞞^{まん}をいつもその杉林で感じた。昼間日が当たっているとときそれはただ雑然とした杉の秀^ほの堆積としか見えなかった。それが夕方になり光が空からの反射光線に変わるとはつきりした遠近にわかれて来るのだった。一本一本の木が犯しがたい威厳をあらわして来、しんしんと立ち並び、立ち静まって来るのである。そして昼間は感じられなかった地域がかしこにここに杉の秀^ほ並みの間へ想像されるようになる。溪側にはまた檜^ひや椎^{しい}の常緑樹に交じって一本の落葉樹が裸の枝に朱色の実を垂れて立っていた。その色は昼間は白く粉を吹いたように疲れている。それが夕方になると眼が吸いつくばかりの鮮やかさに冴える。元来一つの物に一つの色彩が固有しているというわけのものではない。だから私はそれをも偽瞞

と云うのではない。しかし直射光線には偏頗へんぱがあり、一つの物象の色をその周囲の色との正しい階調から破つてしまふのである。そればかりではない。全反射がある。日蔭は日表ひなたとの対照で闇のようになつてしまふ。なんという雑多な溷濁こんだくだろう。そしてすべてそうしたことが日の當つた風景を作りあげているのである。そこには感情の弛緩があり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞がある。これがその象徴する幸福の内容である。おそらく世間における幸福がそれらを条件としているように。

私は以前とは反対に溪間を冷たく沈ませてゆく夕方を——わずかの時間しか地上に駐とどまらない黄昏たそがれの嚴おきてかな掟を——待つようになつた。それは日が地上を去つて行つたあと、路の上の潦みづたまりを白

く光らせながら空から下りて来る反射光線である。たとえ人はそのなかでは幸福ではないにしても、そこには私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景があった。

「平俗な日なため！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与え、冬の蠅を活気づけても、俺を愚昧ぐまい化することだけはできぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾つばをひっかける。俺は今度会ったら医者に抗議を申し込んでやる」

日に当りながら私の憎悪はだんだんたかまってゆく。しかしなんとという「生きんとする意志」であろう。日なたのなかの彼らは永久に彼らの怡たのしみを見棄てない。壇のなかのやつも永久に登っては落ち、登っては落ちて落ちている。

やがて日が翳りはじめる。高い椎の樹へ隠れるのである。直射光線が気疎けうとい回折光線にうつろいはじめる。彼らの影も私の脛の影も不思議な鮮やかさを帯びて来る。そして私は襜褕どてらをまとつて硝子窓ガラスを閉とぎしかかるのであった。

午後になると私は読書をすることにしていた。彼らはまたそこへやって来た。彼らは私の読んでいる本へ纏まつわりついて、私のはぐる頁のためにいつも身体を挟み込まれた。それほど彼らは逃げ足が遅い。逃げ足が遅いだけならまだしも、わずかな紙の重みの下で、あたかも梁はりに押えられたように、仰向あおむけになつたりして藻も搔かかなければならないのだった。私には彼らを殺す意志がなかった。それでそんなとき——ことに食事のときなどは、彼らの足弱

がかえつて迷惑になつた。食膳のものへとまりに来るときは追う箸をことさら緩ゆるつくり動かさなくてはならない。さもないと箸の先で汚ならしくも潰つぶれてしまわないとも限らないのである。しかしそれでもまだそれに弾ねられて汁のなかへ落ち込んだりするのがいた。

最後に彼らを見るのは夜、私が寢床へはいるときであつた。彼らはみな天井に貼りついていていた。凝じつと、死んだように貼りついていて。——いったい脾弱ひよわな彼らは日光のなかで戯れているときでさえ、死んだ蠅が生き返つて来て遊んでいるような感じがあつた。死んでから幾日も経ち、内臓なども乾きついてしまつた蠅がよく埃ほこりにまみれて転がっていることがあるが、そんなやつがまた

のこのこと生き返つて来て遊んでいる。いや、事実そんなことがあるのではなからうか、と言つた想像も彼らのみてくれからは充分に許すことができるほどであつた。そんな彼らが今や凝つと天井にとまつている。それはほんとうに死んだようである。

そうした、錯覚に似た彼らを眠るまえ枕の上から眺めていると、私の胸へはいつも廓かくりよう寥とした深夜の気配が沁しみて来た。冬ざれた溪間の旅館は私のほかに宿泊人のない夜がある。そんな部屋はみな電燈が消されている。そして夜が更けるにしたがつてなんとなく廃墟に宿つているような心持を誘うのである。私の眼はその荒れ寂びた空想のなかに、恐ろしいまでに鮮やかな一つの場面を思い浮かべる。それは夜深く海の香をたてながら、澄み透つた

湯を溢れさせている溪傍の浴槽である。そしてその情景はますます私に廃墟の気持を募らせてゆく。——天井の彼らを眺めていると私の心はそうした深夜を感じる。深夜のなかへ心が拡がってゆく。そしてそのなかのただ一つの起きている部屋である私の部屋。——天井に彼らのとまっている、死んだように凝つととまっている私の部屋が、孤独な感情とともに私に帰つて来る。

火鉢の火は衰えはじめて、硝子窓を潤うるおしていた湯気はだんだん上から消えて来る。私はそのなかから魚のはららごに似た憂鬱な紋々があらわれて来るのを見る。それは最初の冬、やはりこうして消えていった水蒸気すみがいつの間にかそんな紋々を作ってしまったのである。床の間の隅には薄うく埃をかむった葉壇が何本も

空^{から}になつてゐる。なんという倦怠、なんという因循だろう。私の病鬱は、おそらく他所の部屋には棲^すんでいない冬の蠅をさえ棲^すませているではないか。いつになつたらいつたいこうしたことに覺^{けり}がつくのか。

心がそんなことにひつかかると私はいつも不眠を殃^{わざわ}いされた。眠れなくなると私は軍艦の進水式を想い浮かべる。その次には小倉百人一首を一首宛思い出してはその意味を考える。そして最後には考え得られる限りの残酷な自殺の方法を空想し、その積み重ねによつて眠りを誘おうとする。がらんとした溪間の旅館の一室で。天井に彼らの貼りついている、死んだように凝^じつと貼りついている一室で。――

2

その日はよく晴れた温かい日であつた。午後私は村の郵便局へ手紙を出しに行つた。私は疲れていた。それから溪たにへ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億劫おっくうであつた。そこへ一台の乗合自動車を通りかかった。それを見ると私は不意に手を挙げた。そしてそれに乗り込んでしまったのである。

その自動車は村の街道を通る同族のなかでも一種目だつた特徴で自分を語つていた。暗い幌ほろのなかの乗客の眼がみな一様に前方

を見詰めている事や、泥除け、それからステップの上へまで溢れた荷物を麻繩が車体へ縛りつけている恰好や——そんな一種の物ものしい特徴で、彼らが今から上り三里下り三里の峠を躰こえて半島の南端の港へ十一里の道をゆく自動車であることが一目で知れるのであった。私はそれへ乗ってしまったのである。それにしてはなんとという不似合いな客であつたらう。私はただ村の郵便局まで来て疲れたというばかりの人間に過ぎないのだった。

日はもう傾いていた。私には何の感想もなかった。ただ私の疲労をまぎらしてゆく快い自動車の動揺ばかりがあつた。村の人が背負い綱を負つて山から帰つて来る頃で、見知つた顔が何度も自動車を除よけた。そのたび私はだんだん「意志の中ぶらり」に興味

を覚えて来た。そして、それはまたそれで、私の疲労をなにか変わった他のものに変えてゆくのだった。やがてその村人にも会わなくなった。自然林が廻った。落日があらわれた。溪たにの音が遠くになった。年とし古ふるりた杉の柱廊が続いた。冷たい山気が沁しみて来た。魔女の跨またった筈ほうのように、自動車は私を高い空へ運んだ。いったいどこまでゆこうとするのだろうか。峠の隧すい道どうを出るともう半島の南である。私の村へ帰るにも次の温泉へゆくにも三里の下り道である。そこへ来たとき、私はやっと自動車を止めた。そして薄暮の山の中へ下りてしまったのである。何のために？ それは私の疲労が知っている。私は腑ふ甲が斐いない一人の私を、人里離れた山中へ遺棄してしまったことに、気味のいい嘲笑を感じていた。

檉鳥かけすが何度も身近から飛び出して私を愕おどろかした。道は小暗い
 谿たにひだ 壁を廻つて、どこまで行つても展望がひらけなかつた。この
 ままで日が暮れてしまつてはと、私の心は心細さでいっぱいであ
 った。幾たびも飛び出す檉鳥は、そんな私を、近くで見ると大きな
 姿で脅かしながら、葉の落ちた檉けやきや檜ならの枝を匍はうように渡つて行
 った。

最後にとうとう谿が姿をあらわした。杉の秀ほが細胞のように密
 生している遙かな谿！ なんとというそれは巨大な谿だつたらう。
 遠とおもや 靄ものなかには音もきこえない水も動かない滝が小さく小さく
 懸かつていた。眩暈めまいを感じさせるような谿底には丸太を組んだ櫛そりみ
 道ちが寒ざむと白く匍はつていた。日は谿向ここの尾根へ沈んだと

ころであつた。水を打つたような静けさがいまこの谿を領していた。何も動かず何も聴こえないのである。その静けさはひよつと夢かと思うような谿の眺めになおさら夢のような感じを与えていた。

「ここでこのまま日の暮れるまで坐つてゐるといふことは、なんという豪華な心細さだろう」と私は思った。「宿では夕飯の用意が何も知らずに待つてゐる。そして俺は今夜はどうなるかわからない」

私は私の置き去りにして来た憂鬱な部屋を思い浮かべた。そこでは私は夕餉ゆうげの時分きまつて発熱に苦しむのである。私は着物ぐるみ寢床へ這入はいつてゐる。それでもまだ寒い。悪寒あくせに慄ふるえながら

秋の頭は何度も浴槽を想像する。「あすこへ漬つたらどんなに気持ちいいことだろう」そして私は階段を下り浴槽の方へ歩いてゆく私自身になる。しかしその想像のなかでは私は決して自分の衣服を脱がない。衣服ぐるみそのなかへはいってしまふのである。私の身体には、そして、支えがない。私はぶくぶくと沈んでしまい、浴槽の底へ溺死体のように横たわってしまう。いつもきまつてその想像である。そして私は寢床のなかで満潮のように悪寒が退いてゆくのを待っている。――

あたりはだんだん暗くなつて来た。日の落ちたあとの水のような光を残して、冴^さえざえとした星が澄んだ空にあらわれて来た。凍えた指の間の煙草の火が夕闇のなかで色づいて来た。その火の

色は曠漠こうぼくとした周囲のなかでいかにも孤独であった。その火を措おいて一点の燈火も見えずにこの谿は暮れてしまおうとしているのである。寒さはだんだん私の身体へ匍はい込んで来た。平常外気の冒さない奥の方まで冷え入って、懐ろ手をしてもなんの役にも立たないくらいになって来た。しかし私は暗やみと寒気がようやく私を勇気づけて来たのを感じた。私はいつの間にか、これから三里の道を歩いて次の温泉までゆくことに自分を予定していた。犇ひしひとしと迫って来る絶望に似たものはだんだん私の心に残酷な欲望を募らせていった。疲労または倦アソニユイ怠やユイが一たんそうしたものに変わったが最後、いつも私は終わりまでその犠牲になり通さなければならぬのだった。あたりがとつぷり暮れ、私がやっとそこを

立ち上がったとき、私はあたりはまだ光があつたときとはまったく異つた感情で私自身をぎそてう臙装していた。

私は山の凍てついた空気のなかを暗やみをわけて歩き出した。身体はすこしも温かくもならなかつた。ときどきそれでも私の頬を軽くなでてゆく空気が感じられた。はじめ私はそれを発熱のためか、それとも極端な寒さのなかで起る身体の変調かと思つていた。しかし歩いてゆくうちに、それは昼間の日のほとぼりがまだまだ斑らに道に残っているためであるらしいことがわかつて来た。すると私には凍つた闇のなかに昼の日射しがありありと見えるように思えはじめた。一つの燈火も見えない暗やみというものも私には変な氣を起こさせた。それは灯がついたということ、もしくは灯の光の

下で、文明的な私達ははじめて夜を理解するものであるということを信ぜしめるに充分であった。真暗な闇にもかかわらず私はそれが昼間と同じであるような感じを抱いた。星の光っている空は真青であった。道を見分けてゆく方法は昼間の方法と何の変わったこともなかった。道を染めている昼間のほとぼりはなおさらその感じを強くした。

突然私の後ろから風のような音が起こった。さっと流れて来る光のなかへ道の上の小石が齒のような影を立てた。一台の自動車が、それを避けている私には一顧の注意も払わずに走り過ぎて行った。しばらく私はぼんやりしていた。自動車はやがて谿たにひだ 襞を廻った向こうの道へ姿をあらわした。しかしそれは自動車が走っ

ているというより、ヘッドライトをつけた大きな闇が前へ前へ押し寄せてゆくかのように見えるのであった。それが夢のように消えてしまふとまたあたりは寒い闇に包まれ、空腹した私が暗い情熱に溢れて道を踏んでいた。

「なんとという苦い絶望した風景であろう。私は私の運命そのままの四囲のなかに歩いている。これは私の心そのままの姿であり、ここにいて私は日なたのなかで感じるようななんらの偽瞞をも感じない。私の神経は暗い行手に向かつて張り切り、今や決然とした意志を感じる。なんとというそれは気持のいいことだろう。定罰のような闇、膚を劈く酷寒。そのなかでこそ私の疲労は快く緊張し新しい戦慄を感じる事ができる。歩け。歩け。へたばるまで

歩け」

私は残酷な調子で自分を鞭打むちった。歩け。歩け。歩け。歩き殺してしまえ。

その夜晩おそく私は半島の南端、港の船着場を前にして疲れ切った私の身体を立たせていた。私は酒を飲んでいて。しかし心は沈んだまますこしも酔っていなかった。

強い潮の香に混こって、瀝青チヤンや油の匂いが濃くそのあたりを立て罩こめていた。もやい綱が船の寝息のようにきしり、それを眠りつかせるように、静かな波のぼちやぼちやと舷側たたを叩く音が、暗い水面にきこえていた。

「××さんはいないかよう！」

静かな空気を破つて媚めいた女の声^{なま}が先ほどから岸で呼んでいった。ぼんやりした燈り^{あか}を睡む^ねそうに提^{トシ}げている百噸^{トシ}あまりの汽船のともの方から、見えない声^{こび}が不明瞭になにか答えている。それは重々しいバスである。

「いないのかよう。××さんは」

それはこの港に船の男を相手に媚^{こび}を売っている女らしく思える。私はその返事のバスに人ごとながら聴耳^{あいかわらずあ}をたてたが、相不^あ変^あ曖^あ昧^あな言葉^{いまい}が同じように鈍い調子で響くばかりで、やがて女はあきらめたようすでいなくなってしまった。

私は静かな眠った港を前にしながら転変に富んだその夜を回想

していた。三里はとつくに歩いたと思つてゐるのにいくらしてもおしまいにならなかつた山道や、たに谿のなかに発電所が見えはじめ、しばらくすると谿の底をちようちん提灯が二つ三つ閑かな夜の挨拶を交しながらもつれて行くのが見え、私はそれがおおかた村の人が温泉へはいりにゆく灯で、温泉はもう真近にちがいないと思ひ込み、元気を出したのにみごと当てがはずれたことや、やつと温泉に着いて凍え疲れた四肢を村人の混み合つてゐる共同湯で温めたときの異様な安堵あんどの感情や、——ほんとうにそれらは回想という言葉にふさわしいくらい一晩の経験としては豊富すぎる内容であつた。しかもそれでおしまいというのではなかつた。私がやつと腹を膨ふくらして人心つくかつかぬに、私の充たされない残酷な欲望はもう

一度私に夜の道へ出ることを命令したのであった。私は不安な当
てで名前も初耳な次の二里ばかりも離れた温泉へ歩かなければな
らなかつた。その道でとうとう私は迷つてしまい、途方に暮れて
やみ暗のなかへ蹲うづくまつていたとき、おそ晚い自動車が通りかかり、やつと
のことでそれを呼びとめて、予定を変えてこの港の町へ来てしま
つたのであつた。それから私はどこへ行つたか。私はそんなとこ
ろには一種の嗅覚でも持つているかのように、堀割に沿つた娼家
の家並みのなかへ出てしまつた。藻草を纏つたような船夫達が何
人も群れて、白く化粧した女を調戯からかいながら、よろよると歩いて
いた。私は二度ほど同じ道を廻り、そして最後に一軒の家へ這入はい
つた。私は疲れた身体に熱い酒をそそぎ入れた。しかし私は酔わ

なかつた。酌に來た女は秋刀魚船さんまの話をした。船員の腕にふさわしいたくま逞しい健康そうな女だつた。その一人は私に姪いんをすすめた。私はその金を払つたまま、港のありかをきいて外へ出てしまつたのである。

私は近くの沖にゆつくり明滅している廻轉燈台の火を眺めながら、永い絵巻のような夜の終わりを感じていた。舷の触れ合う音とも綱の張る音、睡たげな船の灯、すべてが暗く静かにそして内輪で、柔なまやかな感傷を誘つた。どこかに捜して宿をとろうか、それとも今の女のところへ歸つてゆこうか、それはいずれにしても私の憎悪に充ちた荒々しい心はこの港の埠頭ふしとうで尽きていた。ながい間私はそこに立っていた。気疎けうとい睡気のようなものが私の頭を

誘うまで静かな海の暗^{やみ}を見入っていた。――

私はその港を中心にして三日ほどもその付近の温泉で帰る日を延ばした。明るい南の海の色や匂いはなにか私には荒々しく粗雑であつた。その上卑俗で薄汚い平野の眺めはすぐに私を倦かせてしまった。山や溪^{たに}が※^{せめ}ぎ合い心を休める余裕や安らかな望みのない私の村の風景がいつか私の身についてしまつていることを私は知つた。そして三日の後私はまた私の心を封じるために私の村へ歸つて来たのである。

私は何日も悪くなった身体を寢床につけていなければならなかった。私には別にさした後悔もなかったが、知った人びとの誰彼がそうしたことを聞けばさぞ陰気になり気を悪くするだろうとそのことばかり思っていた。

そんなある日のこと私はふと自分の部屋に一匹も蠅がいなくなっていることに気がついた。そのことは私を充分驚かした。私は考えた。おそらく私の留守中誰も窓を明けて日を入れず火をたいて部屋を温めなかった間に、彼らは寒気のために死んでしまったのではなからうか。それはありそうなことに思えた。彼らは私の静かな生活の余徳を自分らの生存の条件として生きていたのであ

る。そして私が自分の鬱屈した部屋から逃げ出してわれとわが身を責め虐^{さいな}んでいた間に、彼らはほんとうに寒気と飢えで死んでしまったのである。私はそのことにしばらく憂鬱を感じた。それは私が彼らの死を傷^{いた}んだためではなく、私にもなにか私を生かしそしていつか私を殺してしまふきまぐれな条件があるような気がしたからであつた。私はそいつの幅広い背を見たように思った。それは新しいそして私の自尊心を傷つける空想だつた。そして私はその空想からますます陰鬱を加えてゆく私の生活を感じたのである。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「創作月刊」

1928（昭和3）年5月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiya

校正：横木雅子

1999年1月14日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

冬の蠅

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>